

# BCS

PRIZE-WINNING WORKS

BCS賞受賞作品探訪記

31

第四回受賞作品（二〇〇三年）

## 自由学園明日館

前編

世界的巨匠フランク・ロイド・ライト設計の作品である大正時代の学校建築。これを保存修理した上で動態保存していくというプロジェクトが、今から約二十年前に始まった。

新たな試みの先駆者として、その計画や工事の途上は平坦なものではなかった。

### 創立者・羽仁夫妻の 教育理念に共鳴して、 ライトが設計した校舎

都心の巨大ターミナルである池袋駅からほど近い西池袋の閑静な住宅街に、自由学園明日館みよこがくはある。羽仁吉一はによしかず、もと子夫妻によって一九二一（大正十）年に設立された女学校の校舎として建てられた、日本にある数少ないフランク・ロイド・ライト設計の作品だ。

ライトは一九一六（大正五）年に東京・日比谷の帝国ホテル本館を改築する仕事を引き受け、それ以後たびたび来日していた。それはちょうど羽仁夫妻が、自分たちが理想とする女学校を開校しようと構想を練っていたときと同時期にあたっていた。新聞記者として同僚だった羽仁吉一はによしかずとも子こは結婚後、自分たちと同世代の家族に向けた家庭雑誌「婦人之友」（当初は「家庭之友」）を創刊するなど、婦人運動の先駆者として活躍していた。娘を小学校に入学させた時、当時の一般的な女子教育に飽き足らないものを感じ、これからの時代は社会で活躍できる女性を教育する学校が必要だと強く認識し、自分たちで作ろうと創立したのが自由学園だった。

クリスチャンだった夫妻は、飯田橋の富士見町教会に通っていたが、そこで、ライトの弟子である建築家・遠藤新とんたけと知り合う。遠藤は当時ライトの補佐役として帝国ホテル本館の設計や現場監理にあたっていたこともあり、その新しい理想的な学校をぜひライトに設計してもらったら良いと、羽仁夫妻をライトに紹介した。

羽仁夫妻の教育理念に深く共鳴したライトは設計を快諾。帝国ホテルの工事と同時期に新学校の設

ライト建築の典型である、アメリカの草原に建つプレーリーハウスのスタイル。前面の幾何学的な装飾の大きな窓も、まさにライトのスタイル。建物や前庭の通路にふんだんに用いられた大谷石が、全体に一体感をもたらしている。



改修前、建物外側の大谷石は酸性雨や歩行による摩耗によって、目地が浮き出ているような状態だった。修復時には、薬剤による石の摩耗や変質の対策が取られた。

計・施工は進められ、一九二一（大正十）年には中央棟、翌年に西教室が竣工。一九二五（大正十四）年に東教室が、その二年後には遠藤の設計で講堂が完成した。

完成した建物は「自由学園」と名付けられた。建物は軒の高さを抑えて水平線を強調した立面と幾何学的な装飾の建具を用いたデザインで、まさにライトの作風を典型的に表している。「プレリー

### 動態保存のための「五十六項目の改善要求」

一九九七（平成九）年に国の重要文化財に指定。その後、文化財指定と保存修理工事の際には、文化庁や学識者を交えた第三者的な修理委員会が設けられた。建築主の明日館初代館長吉岡氏は、明日館を文化財として有効かつ快適に使用できるよう「五十六項目の改善要求」を委員会に提出した。建物を使いながら保存していくた

出るが、その一方でさまざまな条件に縛られるため、動態保存は不可能ではないかという懸念もあった。しかし、文化庁側の文化財建造物に対する考え方も変化し、建物を使いながら保存する手法も徐々に認められ始めていた。

めには、もとの建物に空調、照明、トイレの変更などの改築を加えることが必要だった。また帝国ホテルにも多用された大谷石は、明日館でも外部、室内、屋外の歩道に使われているが、特に歩道の摩耗が激しく、石と石の間の目地が浮き出ている状態だった。その歩道部分のみ、ほかのもっと固い石に変更したいという要望も出された。

五十六項目のうち、空調、照明、トイレの変更は文化庁にも認められたが、そのほか認められたもの、認められなかったものはさまざま。一九九九（平成十一）年から動態保存を視野に置きながらの保存修理工事が始まった。そこから明日館は、建物を使いながら保存するという新たなステージに踏み出していく。



建物内で一番広い部屋であるホールの開口部は、ライトならではの幾何学模様で彩られている。改修前は、窓の下1/3ほどが小さな窓に変更されていた。

### 老朽化していた明日館、盛り上がる保存運動

ハウズ」と言われる様式の、アメリカの草原に建つようなライト建築が大正時代の池袋に現れた。その後、自由学園は徐々に発展し生徒数も増えたため、一九三四（昭和九）年に東久留米に移転。翌年には男子部も創設。生徒たちの去った西池袋の校舎は「明日館」と名付けられ、卒業生たちが工芸研究や食事研究などの活動をする「明日会」の拠点となった。

知県の明治村に移築された。その後、帝国ホテル解体の無念さもあり、建築界を中心に、ライト設計の明日館はなんととしても残さねばという世論が盛り上がりつついく。また、卒業生たちも学園発祥の校舎を残したいと、熱心な保存運動を繰り広げていった。

そのかたわらで、学校法人としての自由学園は、学校経営が厳しいなか答えを出せないままだった。「保存するにしても、その費用をどう捻出するか。また、補修した建物を何に使うかといった問題もある。一方で、更地にして土地を売却したほうが良いという案も出ていました」と、有賀氏は振り返る。保存か取り壊しかの議論はその後十数年続いた。

明日館は、太平洋戦争の戦火に遭うこともなく戦後も存続。しかし建物は老朽化が進む。自由学園の卒業生でもある明日館館長の有賀寛氏は「屋根はたわむし、雨漏りがひどく、雨の日に室内で傘を差して歩いていったという逸話が残っているほどでした」と語る。

一九六八（昭和四十三）年、帝国ホテル・ライト館が老朽化と地盤沈下等を理由に解体された。多くの建築関係者をはじめとした反対運動があったが、結局のところかなわず、その玄関部分のみが愛

### 歴史的建物を使いながら保存する動態保存という可能性

九〇年代のバブル崩壊後、明日館の建物はより一層老朽化が進んでいたが、一方で保存運動は盛り上がりつつあった。この時期、学園側では、当時の学園長の羽仁翹氏と、卒業生であり明日館の初代館長となった吉岡努氏が、横文彦氏をはじめとする建築家や、建築史家、文化庁等と相談を重ね、保存の可能性を探り始めていた。

学園側が意図していたのは建物を使いながら文化価値を保存する「動態保存」。建物を保存・維持するために、見学者の入館料収入のほか、結婚式やパーティー会場、コンサート会場や撮影場所としての貸し出し、公開講座の教室としての利用などで収益を上げていく方法が考えられた。

それまでは文化財の指定を受けると、改修などのために補助金が



もともと教室だった部屋では、さまざまなジャンルの講座が行われている。創建時は室内に照明設備がなかったが、動態保存を見据えて設けられた。

### 建築主より

## 建物を使いながら残していくことへの覚悟と挑戦を続けてきました



自由学園明日館館長  
有賀寛 Hirosaki Aruga

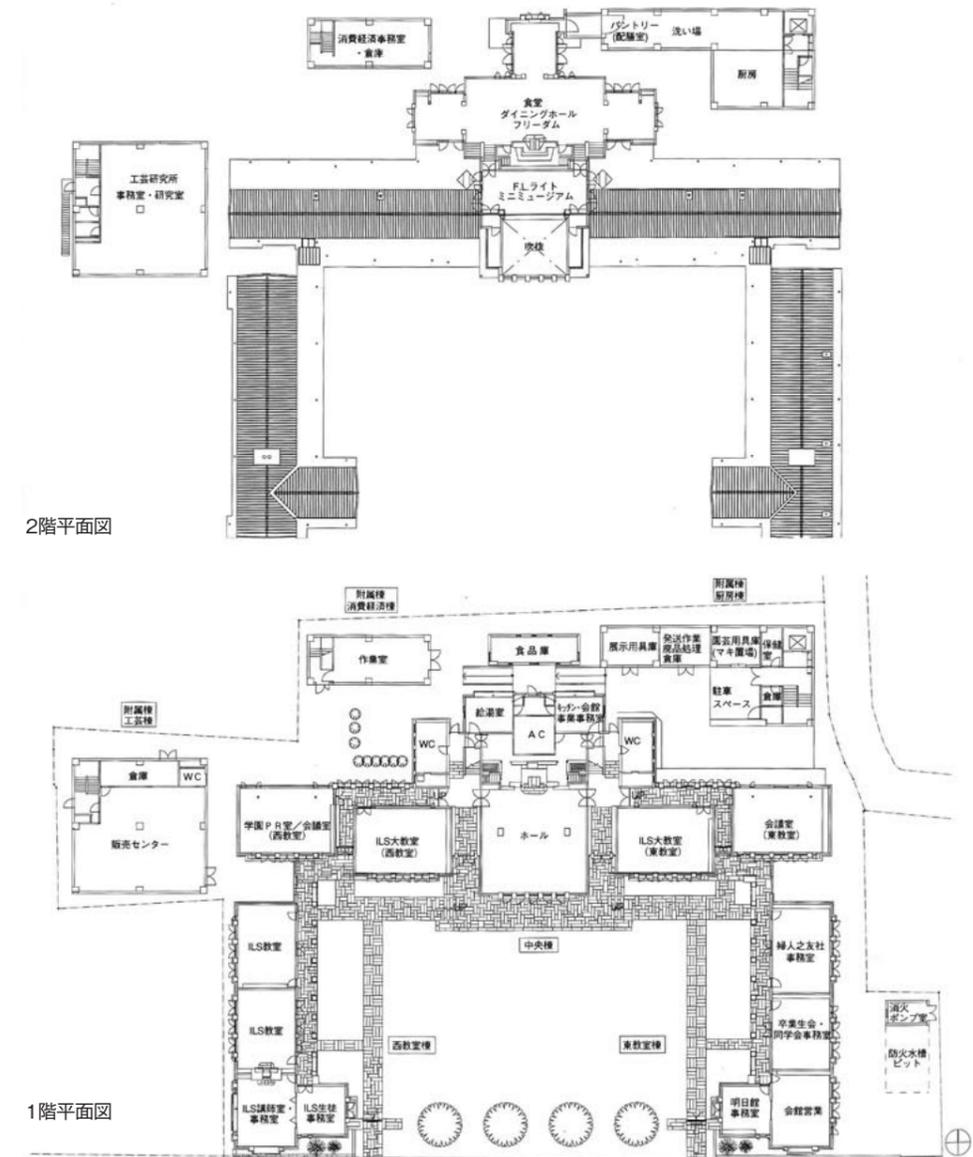
二〇〇一年に開館した頃は、文化財だから室内で火を使えない、建物を傷つけることはできないなど否定的な考え方をしがちでしたが、利用していただくお客様のおかげで、上手な使い方をされているのを見て、こちらが教えられることもいろいろありました。講堂も、防音設備がないので大きな音が出るコンサートはできない。けれども古楽器などの繊細な音の響きがよくて演奏家の方はおっしゃってくださいます。

当初、私たちはサービス業として

二〇〇一年に開館した頃は、文化財だから室内で火を使えない、建物を傷つけることはできないなど否定的な考え方をしがちでしたが、利用していただくお客様のおかげで、上手な使い方をされているのを見て、こちらが教えられることもいろいろありました。講堂も、防音設備がないので大きな音が出るコンサートはできない。けれども古楽器などの繊細な音の響きがよくて演奏家の方はおっしゃってくださいます。

当初、私たちはサービス業として

※帝国ホテル日本館は、建築家フランク・ロイド・ライトの設計によることから通称「ライト館」として親しまれていた。現在、愛知県犬山市の明治村にその玄関部分だけが移築されて残っている。



### 自由学園明日館

JR池袋駅メトロポリタン口より徒歩5分  
JR目白駅より徒歩7分



#### 計画概要

所在地：東京都豊島区西池袋2-31-3  
 建築主：学校法人自由学園  
 設計者：財団法人文化財建造物保存技術協会、大成建設株式会社  
 施工者：大成建設株式会社  
 竣工：2001年9月  
 敷地面積：3,006.4㎡  
 建築面積：942.4㎡  
 延床面積：1,184.7㎡  
 構造：木造  
 規模：地上3階